「自立活動」における主体的・対話的な防災学習

～教えられる者が教える者になる時～

樋井　一宏

（１）生徒の実態

筆者の勤務する学校は知的障がいのある児童生徒が通う特別支援学校である。本実践は中学部１年生の「自立活動」の授業として年間を通じて行った。本校では発達課題別に４つの学習グループを編成し授業を行なっている。本実践は４つのグループの中で知的障がいが最も軽度の学習グループを対象としている。このグループの生徒達は、日常的な会話によるコミュニケーションが可能で、口頭指示の理解も一定可能な生徒達である。一方これまでの学習経験の不足や失敗体験による自信のなさや愛着形成に課題が見られる生徒達でもある。障がい特性もあり自己理解・他者理解や適切なコミュニケーションが自立活動における重要な課題の生徒達でもある。

（２）課題設定の理由

近年、自然災害の多発により防災学習の重要性が高まってきている。それは、知的障がい支援学校に通う生徒達にとっても同様かそれ以上である。障がい特性もあり、新しい場所や急な予定の変更、臨機応変な対応が求められる状況や見通しが持ちにくい環境が苦手な生徒達にとっては、いつ発生するかわからない自然災害や臨機応変な対応を求められる避難行動、日常とは違う避難所での生活は大きな問題となる。この問題に少しでも見通しが持てるよう事前に学んでおく防災学習の意義は大きい。本校でも年間を通じて火災、地震、水害に対する避難訓練が実施され、大阪府下全域で実施される８８０万人訓練にも参加している。これら訓練に合わせて防災に関する知識についても担当教員が説明を行っている。しかし、訓練に参加し説明を受けるだけでは、受動的な学びが中心となる。そのような学びだけでは、その場では知識として知ることができても、知識の定着や実際の行動につながるかは疑問が残る。知識として知るだけではなく、我が事として捉え自ら考え主体的に学ぶことで定着させることが重要である。主体的な学びがなければいざという時の行動につながらないのではないかと考えた。新学習指導要領改訂でも重要視される「主体的で対話的な深い学び」となるような実践を行わなければならない。学びを定着させる上ではインプットだけでなく、アウトプットを行うことが重要である。アウトプットを行うためにインプットした知識を再構築する過程で知識の定着がはかれるのではないかと考え実践を行った。具体的には、年間を通じて行われる避難訓練およびその後の防災に関する知識の説明を自分たちでまとめ直す活動とそれを出題者となってクイズにする活動を考えた。特に後者の活動では出題対象を生徒自身で複数選び、対象者

によって出題形式等を工夫するような活動とした。そうすることで前述の自立活動における「他者理解」や「適切なコミュニケーション」といった課題にもアプローチできるのではないかと考えて実践を行った。

（３）実践の概要

本実践は以下の５つの段階で構成した。

①避難訓練とその後の防災に関する知識の学習（通年　学校行事）
②避難訓練の振り返り（①終了直後の「自立活動」の授業）
③H.P.等で公開されている既存の防災クイズへの挑戦（同上）
④「マイ防災袋を考えよう」（１学期１コマ）
⑤防災クイズの作成、出題（３学期「自立活動」２コマ）

①～③は通年で学校行事としての避難訓練のたびに実施した。④は知識を活用して主体的に考える活動として実施した。そして、年度の最後にまとめの活動として⑤を実施した。

（４）実践の様子

本校の避難訓練は年４回（５月：火災避難訓練　９月：８８０万人訓練　１２月：水害時避難訓練　１月：地震避難訓練）実施している。各避難訓練直後の「自立活動」の時間において、内容の振り返りを行った。形式は統一し、学校所有の iPad を１人一台貸し出し、筆者が keynote で作成した穴埋め問題や選択問題（写真１、２、３、４）を AirDrop で送信、生徒達が穴埋め問題に取り組むようにした。わからない問題はネットで調べたり、友だちに聞いたりして埋めて良いものとした。その時点で覚えていることも重要だが、わからなければ自分で調べるという活動に重点をおいた。早くできた生徒には追加課題として H.P.にある防災クイズに挑戦してもらった（写真５）。おおよその生徒ができた時点で各生徒を指名し答え合わせをして、全部埋められたら教員の iPad に再び AirDrop で送信するようにした。形式を統一したのは、子ども達に授業に対する見通しを持たせるためである。見通しの持てない新規の学習に抵抗感を示しやすい子ども達であるため活動の形式を統一することで内容へのアプローチがスムーズになると考えたのである。

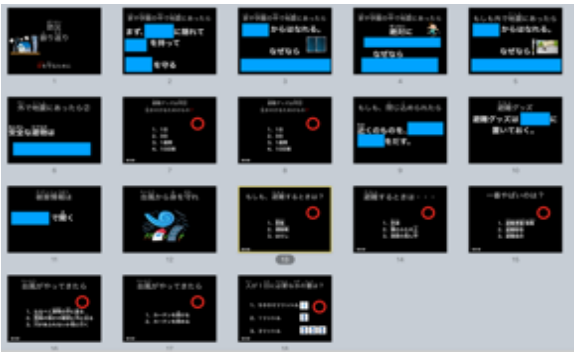
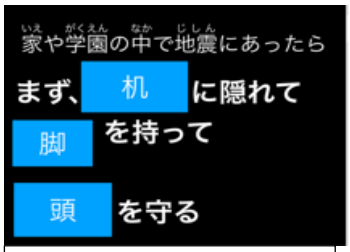
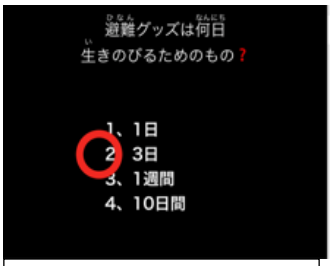


写真１：教員が作成した問題

写真２：生徒が回答したもの





また、iPad での学習とした理由は３点ある。１つ目は年度はじめにプリントでの学習を行った際、途中まで全てできていた１人の生徒が、最後の問いの答えを漢字で書けずプリントを破り捨ててしまうということがあった。答えは浮かんでいたにも関わらず「漢字が書けない」という課題の本質ではない部分で躓き、プリントを破ってしまうという体験をさせてしまった。中学部入学前の学習経験でもこのような失敗体験が積み重なっており、それが自信の無さ、学習に対する不安感につながっていると感じた出来事であった。それならば、予測変換機能の使える iPad を活用する方が良いであろうと考え、取り入れている。２つ目は前述の調べる力の育成である。今日、我々大人もわからないことがあれば多くの場合インターネットを使って検索する。この先の時代を生きる子ども達の将来を考えた時、「検索能力」の重要性は高い。「検索能力」の育成には日頃からの利用回数を増やし、経験を多く積むことが重要であると考え、すぐに検索が行える環境下での取り組みを意識した。ただ調べるのではなく、調べた結果を keynote に打ち込むことで記憶の定着も意図している。３つ目は学習記録の保存である。子ども達の中には特性上プリントでの成果物の管理が難しい生徒がいる。無くしてしまったり、くしゃくしゃにしてしまったり、破れてしまったりして見返すことが困難な状況に陥る生徒もいる。そこで iPad 上に保存すれば無くすことも破損することもなく成果物がきちんと蓄積され、振り返りを行えると考えたのである。

振り返りを通じて知識の定着をはかる活動を行った後に、自ら考える活動を取り入れた。それが「マイ防災袋を考えよう」である。知識として災害発生から最初の３日間をどう過ごすかが重要であることを学んだ子ども達に、自分ならその３日間に何が必要かということを考えさせる活動を行った。必要なものを考え、その理由を記述する活動である。条件は３日間生きられること、持ち出して逃げられる大きさ（重量）であることとした。そして、各自が考えた防災袋の中身を皆で共有しあった。基本的な水や食料の他に、自分の宝物（サッカーボールやアイドルの写真など）を入れると答えた生徒（写真⑥）もおり、普段とは違う避難生活を想像し、心の支えが必要だと考えることができた証である。まだ起こっていない未経験の出来事に対し、思いを馳せ、主体的に考えることができていた。その後、学校にある防災袋の中身を皆で確認し、それぞれがどういった場面や理由で必要かを考えて活動を終えた。

上記の学習以外にも、阪神淡路大震災や東日本大震災の日の直近では、それまでの学習を振り返る形で防災の知識と意識の定着をはかっていった。（写真７）

写真６：生徒の考えた防災袋
＊黄色は最も必要だと思うもの

写真７：振り返りのスライド

そして、年度の学習のまとめとして３学期には、自ら防災クイズの出題者となる活動を行った。これまでの学習で得た知識を基にクイズを作成することとした。この学習では、「誰に」出題するかも自分たちで決めてもらった。子ども達は担任の教員やクラスメートを挙げクイズ作りに取り組んだ。出題する相手に合わせて問題の出題形式を工夫するように伝えて活動を開始した。工夫については具体的にどうするべきかはあえて伝えることを控えたが、子ども達は自ら対象者に合わせた出題形式を決めて問題づくりを行うことができた。この時、使用したのが大阪教育大学 OMELET project の「つくるんです」というアプリである。このアプリは教材作成用に開発されたアプリで筆者も他の授業で使用している。直感的で簡易な操作で問題を作ることができ、文字だけでなく画像や動画、音声を取り入れることが可能である。そのため、子ども達のクイズ作成にも使いやすいのではないかと考え取り入れた。時間の最初に簡単な使用方法と作成例を示し、あとは実際に使用しながら身につけていってもらった。そして、わからないところは教員に質問するという形で活動を行った。子ども達はすぐに使い方をマスターし、自発的に活動に取り組むことができていた。（写真８）教員向けには文字のみ、文字の理解が十分でない友だちにはひらがなと絵といった出題形式の工夫が見られた。そのほか活動中、新たな機能を発見した生徒の作品は全体に共有するようにした。そうすることで、他の子ども達もマネすることができ、発見した生徒は自分の気づきを認められたと感じることができるのではないかと考えたからである。実際に友達の発見を聞いた生徒が「それどうやるん？」と質問し、発見した生徒が「ここを〇〇して・・・」と誇らしげに教えている姿も見られた。

写真８：クイズ作成の様子

写真９：教員向けクイズ

写真１０：生徒向けクイズ

全員が問題を作り終えたところで、皆で出題しあい、成果を共有することができた。「つくるんです」の機能の中にある即時正誤判定によってその場で正解不正解を知ることができ、楽しみながら活動することができた。

後日、子ども達が指定した回答者に時間を見つけて回答してもらい、その様子を子ども達に伝えた。回答してもらう前には子ども達から「あのクイズもうやってもらった？」など、自分の作った

ものが相手にどう受け止めらえるかを楽しみにしているような様子も見られた。

（５）成果と課題

１年を通じて学習を積み重ねることで、防災に関する知識を定着させることができた。阪神淡路大震災や東北大震災の日の直近に行った防災の振り返りでも、避難時の注意事項などをきちんと答えることができていた。また、防災袋の中身を考える活動では、最低限必要な水や食料だけでなく、実際に避難した際のことを想像して考えることができていた。

また、まとめの活動において作成したクイズにおいては、それまでの知識を整理し再構築してクイズにするだけでなく、「誰に」出題するかによって出題形式を自分で考えることができており（写真９、１０）、他者意識も確認することができた。教員向けには漢字表記で、クラスの発語のない友達には絵でと出題形式を変えている生徒がほとんどであった。

学習活動を通じて、自分で調べる活動や考える活動、意見を共有し合う活動、教え合う活動、出題・回答し合う活動を取り入れたことで単元全体として主体的で対話的な学習活動を実践することができたと感じている。（写真 11）生徒達が防災を我が事として考え、学び合うことができたと言える。これまで知識を受け取る「教えられる者」であった子ども達が、友だちにその気づきや学びを「教える者」になることができたと考えている。その結果、年度当初ニュースなどは「知らん」「興味ない」と言っていた生徒たちであったが、他県で地震や水害があった翌日には会話の中で「昨日〇〇で地震あったなあ」と話しかけてくることもあった。少しずつではあるが、防災の意識の高まりを感じられた場面であった。

しかし、災害はいつどこにどんな形で発生するかわからない。そのため、常に意識していなければ、いざという時に行動に結びつかない。もちろん、災害が起こらないことが一番であるが、もし起こった時、子ども達が自分たちで自分の身を守り、見通しが立たない苦手な状況を乗り切れるよう、今後も学習を継続していく必要があると考えている。そして、自分の身を守るだけでなく、その知識と行動で誰かを守れる大人になってほしいと願っている。

写真 11：活動の様子